

復活節第二主日（神のいつくしみの主日）

ヨハネ 20・19-31

2022.4.24

カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日、わたしたちは復活節第二主日のごミサを捧げているわけですが、この復活節第二主日はご存知のように、「聖書と典礼」にも書いてありますけれども、神のいつくしみの主日ということが2000年のときにヨハネ・パウロ二世によって全教会の典礼に入れるようにと決まりました。

もともとは聖ファウスティナというポーランドの20世紀前半のシスターにイエス様のご出現なさってというか、示されたヴィジョン、1930年代ですが、から来ています。神のいつくしみに信頼する信仰を深めなさいというふうに告げられたということです。そのイメージとしては、イエス様が聖ファウスティナというシスターに示された姿をもとに描かれた絵があります。暗い背景で白いイエス様が右手をちょっと祝福のために挙げていて、自分の胸を指さしていて、そこから赤と白の光線が出ているという、見たことがあると思いますけれども、神のいつくしみはそういうイメージなんだとおっしゃるわけです。

ポイントは、イエス様の傷跡から恵みが、愛があふれているということです。傷跡は、体の傷跡と言うよりは、イエス様がわたしたちのためにお引き受けられた苦しみ全部を指している。そして、弟子たちや、あるいは後の世代のわたしたちがイエスの呼びかけに無関心であるということから来る傷跡です。でも、それが愛の源なんだ、ということですね。

それは、当たり前のことではありませんよね。それは、正反対のイメージを考えてみれば分かると思いますけど、自分の傷から愛がほとばしっているというイエス様のイメージと正反対にあるのが、日本の怪談に出てくる幽霊の姿なんじゃないかと思っています。日本のお話に出てくる幽霊は、自分の苦しみにずうっと留まっていますね。そして、その苦しみの原因になった相手は勿論のこと、無関係な人も同じ苦しみに引きずり込もうとして、でも、それで苦しみが癒えないから何度でも無関係な人にも現れて、「うらめしや〜」と言って出てきて、そしてその苦しみの中に引っ張って行く、というのが幽霊。

それが、実は特別なお話の中のものではなくて、わたしたちが、自分がいろんな苦しみの体験をした、傷ついたっていうことの一般的な反応の極致なのではないかと言って良いのではないかと思います。自分が苦しんでいるのだから、その原因になった奴は幸せであることは勿論許せないし、そして周りの人も同じ苦しみの中に、恨みの中に引っ張って行く。そこまでいかなくても、いろんな傷を受けた人は、二度とそういう辛い思いをしないように壁を作るとか、それがわたしたちの自然な反応かもしれません。

でも、イエス様はそうじゃない在り方が人間にあるんだよ、ということをご自分の姿で示してくださった。傷を受けても、それがために愛が弱まるんじゃないくて、むしろ愛のために苦しみ、そして、苦しむ故に相手への思いをもっともっと、あるいはいろんなことをわたしたちは思いやれるようになる、というのが人間、そういう道もあるんだよ、ということをご自分の姿を通して示してください。

だから、ある意味でそういうイエス様の姿の中に、苦しみの反応というのは必ずしも恨みと周りの人を巻き込んでいく辛い思いだけではない、人間はむしろそれを愛の源にすることもできる、というイメージを見せてくださっているということそのものが、ある意味では信仰の恵みと捉えたらいいのではないのでしょうか。そして、イエス様はわたしたちも同じような道を選ぶように招いていらっしゃる。とてもできません、と思いますけれども、そうなんです、それは自然な状態でできるから招かれているんじゃないんです。昔風な言い方をすれば、恵みのうちにわたしたちが変えられていく。自然の状態で与えられているものではない。超自然の恵み、信仰の恵みだと思います。

わたしたち皆、心の傷によって一人ひとりの人格が作られていると言ってもいいんじゃないかと思いますけれども、この傷がどのように今の自分の行動に影響しているのかということを振り返りながら、イエス様がわたしを呼んでいる、そして、自分の苦しみとわたしたちの苦しみが合わさったときにそれが恵みの源になるんだよ、と呼び掛けていらっしゃるということを、この神のいつくしみの主日に思い出したいと思います。そして、ご絵を黙想したりしながら、わたしたち自身がイエス様のその傷跡からほとばしっているいつくしみを受け取っていくことを通して、イエス様ご自身がわたしたちを変えてくださるんだ、だから、あの絵の下には必ずこの言葉を入れなさいって、「イエスよ、わたしはあなたに信頼します」という言葉を必ず、ポーランド語だけどそれぞれの国の言葉で書いてあるようです。

その思いで、一人ひとり、今日、ご聖体とか祝福を通してイエスの思いを一人ひとりの中に受け取っていくことを通して、わたしたちが自分のいろんな形で抱えている苦しみとか傷をイエス様の傷跡に合わせることで、周りの人や自分自身の不幸の源であるその傷跡が自分にとっても癒しに、そして周りの人にとっても良い関係を築いていく出発点に変えていただけるように、恵みに信頼しながらこのごミサを一緒にお捧げしていきたいなと思います。

今日、わたしたちの中にお迎えするイエスご自身の恵みによって、わたしたちのいろんな形の苦しみとか傷跡、あるいは今も血が流れている心の傷や苦難が恵みの源に変えられますようにお互いのために祈り合いながら、このごミサをお捧げしたいと思います。